特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

特集にあたって
Editor's Introduction

川澄　未来子　名城大学
Mikiko Kawasumi　Meijo University

日本色彩学会では，研究発表や学術交流のために，年2回ペースで大会が開催されている．特に毎年5～6月ごろに開催される全国大会は学会最大のイベントで，運営は3支部が持ち回りで担当し，開催場所も日本全国の各地を巡っている．また，本学会が共催する色彩の国際会議についても，この10年で2回日本に誘致している．学会の大会は，最新の技術動向や研究成果に触れて意見を交わし合える貴重な機会であるとともに，人と人との出会いや再会，開催地の産業や文化との出会いがあるのも大きな魅力の一つである．

大会運営の実行委員は，それぞれに本職がある傍らボランティアで準備を進めるが，その際にテーマやスローガンを掲げて一丸となり，統一感と求心力をもって参加者を集める努力を重ねている．私も全国大会や国際会議の運営に携わった時には，色彩を駆使したロゴやポスターを制作し，会場のサイン計画や記念品にも注意を払うことにより，アクセス性やホスピタリティを高める場面に立ち会ってきた．もちろん，発表数の確保やプログラム構成の質，当日の進行や議論や交流などの成功は，大会の根幹である．一方で，裏舞台を支えるさまざまなデザインワークが，多くの参加者を笑顔にし，「次も参加しよう」「再び訪れたい」の気持ちを引き出す効果を高めているのも事実である．これまでに日本色彩学会の大会で生み出された素晴らしいクリエーションの数々を，記録に残すタイミングはないものかと感じていたところ，今回，学会誌で特集として取りあげるチャンスに恵まれた．

今回の特集では，最近10年のロゴマークやポスター，記念品などのデザインワークをまとめて紹介することにし，東海支部の牧野暁世さん，多田真奈美さん，祖父江由美子さん，渡辺真由子さんに声をかけて執筆をお引き受けいただいた．そのあとに，他支部開催の大会で数多くのデザインを手掛けられた関東支部の荒木紀久子さんをお誘いし，原稿をお寄せいただいた．

次ページ以降を読んでいただくと，それぞれの発想のきっかけ，具体的な制作プロセス，一つ一つに詰まった想いやご苦労などを感じていただけると思う．また，大会参加された方々は，きっと懐かしく温かい思い出が昨日のことのように蘇るだろう．本特集では，2011年以降のワークを時系列で紹介させていただく．

1. 全国大会のビジュアルデザイン('11～'21)
2. AIC2015 Tokyoのビジュアルデザインと風呂敷製作
3. 第47回全国大会[名古屋]'16のビジュアルデザイン
4. ACA2019 Nagoyaのビジュアルデザイン
5. ACA2019 Nagoyaのカンファレンスバッグ製作
6. 第53回全国大会[名古屋]'22のビジュアルデザイン

ご多忙にも関わらず快く執筆をお引き受けいただいた5名の著者の方々には，心から感謝したい．

情報掲載サイト

AIC2015公式サイト
http://www.color-science.jp/AIC2015/
AIC2015 風呂敷の使い方紹介
http://www.color-science.jp/AIC2015/?page_id=868
全国大会［名古屋］'15ポスター
http://www.color-science.jp/zenkoku2016/nagoya2016poster.pdf
ACA2019 公式サイト
http://www.color-science.jp/ACA2019/top/index.html
ACA2019 ロゴデザイン紹介
http://www.color-science.jp/ACA2019/Attendees/index.html#LD
ACA2019 カンファレンスバッグ紹介
http://www.color-science.jp/ACA2019/Attendees/index.html#CB
全国大会［オンライン］'21公式サイト
https://www.color-science.jp/zenkoku2021/
全国大会［名古屋］'22大会グッズとビジュアル紹介
https://www.color-science.jp/zenkoku2022/#kaisaiannai7
（すべて，最終閲覧日：2023年5月7日）

色彩学　第2巻　第2号　2023年　67－68

1ページ目のみ限定公開（全ページ閲覧にはログインが必要）

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

全国大会のビジュアルデザイン
Visual Design of the CSAJ Annual Meetings

荒木 紀久子　カラリスト
Kikuko Araki　Colorist

1. 概要

2011年千葉大会以来，2年毎に関東地域で開催される全国大会のポスターを担当してきた．このようなポスターを作ることになった経緯は忘れてしまったが，デザイナー上がりで研究の場に疎い私は，普通は白地に墨で縦書きされる看板が学会のスタンダードだという認識もなく，やりたい様にやってしまった．良かったか悪かったかは分からないが，10年経って関東地域以外でもカラフルなポスターが作られているということは，そう悪い提案でもなかったのかと振り返っている．ここに，私が担当した5回の全国大会のポスターのデザインについてまとめてみる．

2. 第42回全国大会［千葉］'11

実行委員会の度に訪れる千葉大学西千葉キャンパス構内は，けやきの木が印象的であった．初夏から夏にかけては，青々とした葉が茂り木陰を歩くのはとても気持ちが良い．冬には美しい樹形が冷たい空を差して立ち上がっている．千葉大学を会場に行われる全国大会は，この印象的なけやきをモチーフにしたいと思った．実行委員会で最初にポスター案を示す時は，学術団体の研究発表の場である全国大会に，このデザインは絵本のようではないかと不安であったが委員会で了承を得て，けやきのポスターをブラッシュアップしていった．けやきの樹形をスペクトルカラーのグリットで表現した．全国大会の表記は縦組みで，その他はけやきの足元の空白に横組みで置くことで縦長のけやきとバランスが取れたと思う．開催日の5月中旬は緑が美しい季節であることから，開催日と「42」にグリーンを使用した．デザインを施した名札やタイムテーブルを色分けにして表記をしたのは，千葉大会が初めてではないかと思う．

図1　第42回ポスター

3. 第44回全国大会［早稲田］'13

会場となる早稲田大学は都心にあり有名な大学であるが，ポスターのデザインのテーマを見つけることに苦心した．早稲田のスクールカラーのえんじ色は，箱根駅伝やラグビーの試合などの映像でおなじみである．他の大学のスクールカラーは知らなくとも早稲田のえんじ色は誰でもが知るところだろう．そこでこの印象的なえんじ色を使って，色をテーマにポスターを組み立ててみようと思った．ディープトーンで全体をまとめて江戸の雰囲気のある色使いとした．ここには文字情報と色以外は無い．「日本色彩学会第44回全国大会」の漢字の一文字あるいは一部に色を使い，情報は5つのカラーブロックに白抜きの文字で表した．黒を入れて12色を使った．ただ，同じ色に見えても小さい面積は微妙に明るくするなどの工夫はこらした．気に入っているデザインである．

図2　第44回ポスター

4. 第48回全国大会［東京］'17

文化学園大学は西新宿の高層ビル群をすぐ側に控え，新宿中央公園や新宿御苑などの緑にも恵まれた甲州街道沿いに立つ．第48回全国大会のポスターはこの立地をデザインすることとした．古地図に見る山を俯瞰して描く手法にヒントを得て，都会のビル群をグレーの矩形の連続で表し，近隣の公園は円形の集合体

色彩学　第2巻　第2号　2023年　69－70

1ページ目のみ限定公開（全ページ閲覧にはログインが必要）

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

AIC2015 Tokyoのビジュアルデザインと風呂敷製作

Visual Design and Furoshiki Production of the AIC2015 Tokyo

荒木　紀久子　カラリスト
Kikuko Araki　Colorist

1. AIC2015 Tokyoのテーマとおもてなし

国際色彩学会中間大会（AIC2015 Tokyo）は2015年5月19日から22日に東京・お茶の水ソラシティカンファレンスセンターで開催された．"Color and Image"のテーマのもと，口頭発表58件，ポスター発表153件が集まり，28カ国から370名の参加を得た．2008年の準備委員会から2015年の実行委員会まで約7年半に渡り計34回の会議が行われ，多くの方々のご尽力により成功裡に終わった．オープニングは，荒木のいけばなが飾られた会場で，明るいイエローの着物をまとった渡邊香澄氏による琴の演奏で幕を開けた．世界的な建築家であるSANAAの妹島和世氏による基調講演"The Gathering Space"，Jon Yngve Hardeberg氏による招待講演"Multispectral Colour Imaging: Time to Move out of the Lab?"，小松英彦氏による招待講演"Neural Representation of Color in Visual Cortex"も好評を得た．東京湾クルーズ「シンフォニ」のバンケットや国技館での相撲観戦などのオプショナルツアーも，大会を華やかに彩った．

2. ロゴマークのデザイン

2011年，日本色彩学会ニューズに同封されていた「AIC2015ロゴマークの公募について」がそもそもの始まりだった．応募要項では，AICの中間大会へのふさわしさと"Color and Image"への合致が条件とされていた．ロゴマークは，誰が見てもそのことを表していることがわかるシンプルで印象的なデザインを心がけ，A・I・Cの3文字を減法混色の三原色で重色することにした．それぞれの色が際立つように太くて安定感のあるフォントを選び，何通りもの配色を試した結果，AはシアンIはマゼンタ，Cはイエローにした．3つの文字の不透明度を40%くらいにすることで重色された部分の形が明確になる．接点の位置にこだわりながら形の調整を行い，最後にオブジェクトから透明部分を分解し，一つずつのパーツに色を自由に与えた．見た目のバランスを考え，シアンはC70%・M20%，マゼンタはM65%，イエローはY90%，重色結果の赤はM100%・Y80%，緑はC100%・Y100%，青はC90%・M90%，黒はK100%とした．

このようにしてデザインしたロゴマーク（図1）は，2011年夏に採用の知らせを受け，その後の約4年間は，私も実行委員会の広報委員として準備を進めた．ロゴマークは黒地で展開する場合もあり，その時には黒の部分が欠けたように見えてしまうため，加法混色バージョンの配色もデザインした（図2）．開催前年度あたりからはニューズにも毎号ロゴマークがあしらわれ，横に細長いヘッダー，郵便物用のシール，名刺用の極小ロゴマーク，スタッフTシャツ（図3），カンファレンスバッグ，ボールペン，USBメモリなどにも展開された．

3. AICガール誕生

続いてポスター制作するにあたり，日本らしく印象的なモチーフを探した．世界の人々は日本の何に魅力を感じているのか．漫画，漢字など流行りのものを一通りイメージしてみるものの，ポスターとしてインパクトに欠ける気がしていた．当時テレビで報じられるミスユニバース日本代表は，意志の強さを表すような西洋風のアイメイクを施しながらも，髪は市松人形のような長いおかっぱ頭をしていた．黒髪は日本のイメージなのだろうか．これをモチーフにし，着物を着た全身像から始まり，伝えたいものだけを残していった結果，頭だけが残った．「どうぞ日本にいらしてください」という柔

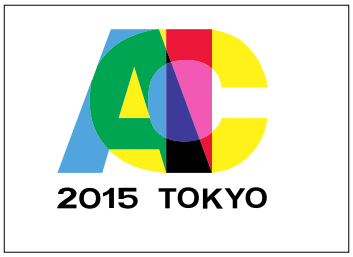

図1　ロゴマーク（減法混色）

図2　ロゴマーク（加法混色）

図3　スタッフTシャツ

色彩学　第2巻　第2号　2023年　71－72

1ページ目のみ限定公開（全ページ閲覧にはログインが必要）

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

第47回全国大会［名古屋］’16のビジュアルデザイン
Visual Design of the 47th Annual Meeting in Nagoya 2016

牧野 暁世　東海学園大学
Akiyo Makino　Tokai Gakuen University

1. 第47回全国大会［名古屋］’16の概要

2016年6月4日（土），5日（日）に日本色彩学会第47回全国大会［名古屋］’16を名城大学天白キャンパスで開催した[1]．研究・作品発表は70件，企業展示は18件で，海外からの発表者やスタッフ等を合わせて総勢300名以上が参加した．本大会では『自然の光，人工の光』というテーマを掲げ，これに沿ったさまざまな企画を実施した．初日の特別企画「自然の光，人工の光」では，2名の話者により，ホタルの生態や発光の仕組みおよび生物多様性保全に関する話題と，青色LEDの発光の仕組みや開発の歴史および知的財産の考え方に関する話題が提供された．特別企画と連動した交流会では，和風庭園に放たれたホタルの光の鑑賞を盛り込み，参加者は自然の尊さと日本文化の豊かさに触れた．二日目のランチョンセミナー「先人の知恵，匠の技に学ぶデザイン思考」では，無意識や輪郭などのキーワードを用いて，先人が創造したアートやデザインについて講師から説明がなされた．また，会期中はスポンサー企業や地元ベーカリーの協力を得てドリンクやカラフルなメロンパンを提供した．このように，本大会は光や色彩に関する最新の情報や，この地・この季節ならではのおもてなしを通じ，自然環境と技術革新が共存した，持続可能な地域のあり方について多様な参加者と一緒に考える機会となった．

2. ビジュアルアイデンティティのコンセプトと目標

本大会実行委員会において，本大会の魅力を的確に表現するビジュアルアイデンティティの制作が決定され，筆者がその担当者となった[2]．実行委員会での議論をもとに，ビジュアルアイデンティティのコンセプトを，大会テーマ『自然の光，人工の光』と開催地の地域性および季節性の表現とし，これまで実施された全国大会等を踏まえ，独自性，視認性，展開性を達成することを目標とした．はじめに，ビジュアルアイデンティティとしてロゴマークおよびロゴカラーを製作することとした．つぎに，これに基づいたポスター，当日の会場案内，ノベルティなどの広報物を作成することとした．

3. ビジュアルアイデンティティ

3. 1　ロゴマーク

ロゴマークは主たるモチーフを光とし，光の特徴である，1．赤・緑・青といった個別の色光を重ねるごとに明るくなり，これらを全て重ねるともっとも明るくなる，2．スペクトルは一般的に7つの色名で記述される，といったことを踏まえて形状を検討した．いくつかの試作をおこなった後，ロゴマークの中心をもっとも明るい白とし，その周辺を7色で囲むといったアイデアと，光という漢字に基づいた図形を中心に配置し，それを線でつなぎ全体を造形するといったアイデアを融合させた複数案を作成した．複数案はいずれも全体としては七角形であるとともに，図地反転で光の漢字や光が拡散するような形状とし，個別としては7つの三角形のパーツで構成された形状とした．広報物への展開も踏まえて全体や三角形のパーツの細部を調整し，最終的に実行委員会において提案した4案のうち，1案が採用された．

3. 2　ロゴカラー

ロゴカラーは，視認性を確保するため，広報物等の背景色となりやすい無彩色とのコントラストが際立つように，高彩度色とすることとした．あわせて，当日の会場内における色彩調和を担保するために，事前に会場の壁面にアクセントカラーとして用いられている塗装を視感測色し，その色彩値を確認した．それらを踏まえ，PCCSによるvトーンやbトーンを使用した7種類の色彩値を採用することとした．ロゴマークおよびロゴカラーを図1に示す．

日本色彩学会
第47回全国大会
［名古屋］’16

		色の名称　（読み）	Color Name	色のイメージ
1		赤崎レッド（あかさき れっど）	Akasaki Red	赤崎勇教授ノーベル賞受賞に敬意を表して
2		橙燭（だいだい）	Candlelight	八事山興正寺（交流会場）のタベ
3		金鯱（きんしゃち）	Nagoya Yellow	名古屋市，名古屋城の金のしゃちほこ
4		蛍光緑（けいこうみどり）	Firefly	蛍，「自然の光」
5		水無月（みなづき）	June	6月，梅雨
6		青色LED（あおいろ えるいーでぃー）	Blue LED	青色LED，「人工の光」
7		紫陽花（あじさい）	Ajisai	名城大学ロゴカラーの近似色，6月の花

図1．ロゴマークおよびロゴカラー

色彩学　第2巻　第2号　2023年　73－74

1ページ目のみ限定公開（全ページ閲覧にはログインが必要）

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

ACA2019 Nagoyaのビジュアルデザイン
Visual Design of the ACA2019 Nagoya

多田 真奈美　グラフィックデザイナー
Manami Tada　Graphic Designer

1. ACA2019 Nagoyaのテーマとおもてなし

2019年11月29日～12月2日に，第5回アジア色彩学会（ACA2019 Nagoya）が名城大学ナゴヤドーム前キャンパスで開催された．大会テーマは“Color Communications”．基調講演2件，招待講演9件，口頭発表67件，ポスター発表68件に加えて，セミナーやワークショップ，企業出展が企画され，350名以上が関わる活況な大会であった[1]．また，学術プログラムのみならずジャパンカルチャーを前面に出したホスピタリティで，国内外の参加者に“名古屋”を周知するとともに，地域文化も楽しめるようにした．

2. ビジュアル制作の目標

本大会は遠方からの参加者が多いため，ビジュアル制作において二つの目標を設定した．一つ目は，名古屋らしいデザイン表現である．日本らしさはもちろんのこと，地域の伝統や文化が反映された表現を目指した．二つ目は，参加者に情報が伝わりやすいデザインである．視覚効果により言語レスに一目で情報が伝わるように心がけた．

3. 基本デザインの作成

3. 1　ロゴマーク

“ACA”の文字で伝統と斬新さを表現した（図1）．左右の“A”の勾玉形は名古屋城の金鯱をイメージした．金鯱は徳川家康の支配力や尾張徳川家の権威を誇示するために作られた絢爛豪華な天守閣飾りであり，会場の名城大学シンボルマークにも使われている．“C”には色彩学会らしく，色相環を配置した．

図1 ロゴマーク

図2 テーマカラーとデザインモチーフの組合せ

3. 2　テーマカラー

大会のテーマカラーは，緋，金色，本紫の3色をメインにし，さらにサブカラーとして縹色，苔色の2色を追加し，全5色とした（図2）．

緋（あけ）：「茜」で染めた深く鮮やかな赤色．辰砂や神社の鳥居，猩々（名古屋南部に伝わる架空の生き物）のイメージから採用．

金色（こんじき）：名古屋城を象徴する金鯱の色であり，豊かさや権力を表す色．

本紫（ほんむらさき）：愛知県のシンボルである花，カキツバタのイメージから採用．本紫は紫紺染めの高貴な色で，古代では冠位最上位の禁色とされた．

縹色（はなだいろ）：「藍」で染めた青色の古名．露草が一面に咲いた「花田」の意味もある．

苔色（こけいろ）：濡れた苔の深く柔らかい緑色．

3. 3　デザインモチーフ

名古屋城本丸内で見かけた様々な日本の伝統紋様をパターン化してデザインモチーフを作成し，色彩と重ね合わせて使用した（図2）．

七宝紋様：名古屋城本丸の取手金具にみられた紋様．円＝縁を永遠に繋ぐ吉祥紋で，「七宝」の名はご縁が仏教の七つの宝のように尊いという意味から来ている．

高麗縁小紋：名古屋城本丸の畳縁の紋で別名「九條紋」．二条城や京都御所でもみられる格式高い紋様である．

葵紋様：名古屋城本丸の欄間でみられる紋様．葵は神紋とされ，三葉葵は徳川家の家紋として有名である．

鱗紋様：龍や蛇の鱗に似ている厄除けの紋様．

市松紋様：別名「石畳」，佐野川市松が歌舞伎の衣装に使ってから「市松紋様」と呼ばれるようになった．

4. デザインの展開

4. 1　フライヤー

研究発表の募集案内（Call for Papers）には，テーマカラーとデザインモチーフを盛り込んだ（図3）．名古屋の位置を示す日本地図を配置し，名古屋城の茶室に見られる金の茶釜や，秋の紅葉の写真を掲載し，大会参加への期待が高まるようにした．また，金丸克司氏

色彩学　第２巻　第２号　2023年　75－76

１ページ目のみ限定公開（全ページ閲覧にはログインが必要）

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

ACA2019 Nagoyaのカンファレンスバッグ製作

Conference Bag Production of the ACA2019 Nagoya

祖父江 由美子　色彩講師
Yumiko Sobue　Color Instructor

1. ACA2019のテーマとおもてなし

ACA2019（第５回アジア色彩学会）は2019年11月29日から12月２日まで，名城大学にて開催された．テーマは「カラーコミュニケーション」であった．アジアを中心に世界10カ国から約140件の発表が集まり，活気ある学術交流の機会となった．ACAは日本では初開催であったため，実行委員会では，日本の伝統文化の豊かさを紹介しながら参加者をもてなすよう工夫した．受付前には，尾張津島天王祭りを描いた屏風絵を展示し，前夜祭では着物の独創的な帯結びを紹介し，セッション間の休憩時には茶の湯のお点前で一息つけるようにした．最終日のエクスカーションは，晩秋の色が残る高山と白川郷へ赴き，カラーを通じた４日間のコミュニケーションを締め括った．

2. バッグのコンセプト

実行委員会において，カンファレンスバッグの製作が決定され，筆者がその担当となった．柄や素材で日本ならではの特徴を表現し，「おもてなし」の気持ちを伝えるものにしたいと考え，正絹の着物地で製作することを提案した．絹の特徴は，上品な艶と驚くほどの軽さである．絹の繊維は人間の肌を形成しているタンパク質と近い成分でできているため，肌あたりが優しく滑らかで，アジアの国々の民族衣装にも欠かせない存在である．正絹の着物が完成するまでには，染めや織りに関わる職人の技術と膨大な時間の手作業がある．同じ背景を共有するアジア諸国とのコミュニケーションにもふさわしい素材であると考えた．

3. バッグの製作

3. 1　素材

新品の着物生地は高価なため，リサイクルの着物や反物を利用することを決め，４月に実行委員で名古屋の大須に出かけた（図１）．ここは古着を扱う店が集まる全国でも有名な場所で，着物の購入に訪れる外国人観光客も多い．リサイクル呉服店を何軒か回り，着物地や帯地の反物の他，質の良いリサイクル着物を手に入れた．大須観音の境内の骨董市でも，金糸入りの菖蒲柄の西陣織の反物を購入した．菖蒲の葉の香りは厄災を払うとされ，魔除けのお守りとされている．購入する素材は正絹のみとし，紬など生地に張りがあり丈夫なもの，艶や手触りが優れたもの，吉祥模様など柄に魅力のあるものを選ぶよう心がけた．着物は手分けして丁寧に解いた．着物生地は，学会員の家族からも提供してもらい，必要数をそろえ縫製の手配をした．しかし８月，参加登録者数が増え，バッグ数も増やさねばならなくなった．夏の間は薄地の反物や浴衣地しか店頭になく，生地探しが難航した．秋を待ち，質の良いものを一つ一つ買い足し，モダンな幾何学模様の紬など，男性向きの色柄もそろえることができた．

図１ 大須で素材を購入

3. 2. デザイン

着物地の一反は，幅38cm，長さ12ｍとおおよそ決まっている．試作を繰り返し，A4サイズの資料がゆったり入るよう，縦34cm，横32cmの長方形とした．持ち手には，柔らかく手になじみやすい鞄用の布テープを選び，並べた時の統一感を考え，濃紺一色とした．長さは，エクスカーションのバス内や現地での買い物にも使用しやすいよう，腕にかけて持ちやすい42cmとした．

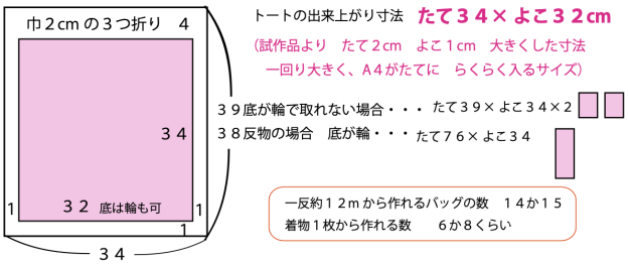

図２ バッグの設計図

色彩学　第2巻　第2号　2023年　77－78

1ページ目のみ限定公開（全ページ閲覧にはログインが必要）

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

第53回全国大会［名古屋］'22のビジュアルデザイン
Visual Design of the 53rd Annual Meeting in Nagoya 2022

渡辺 真由子　ジュエリーデザイナー
Mayuko Watanabe　Jewelry Designer

1. 第53回全国大会［名古屋］'22の概要

日本色彩学会第53回全国大会［名古屋］'22は，2022年6月25日（土），26日（日）の2日間，椙山女学園大学星が丘キャンパスでの現地参加とオンライン参加の両方を取り入れた本学会初となるハイフレックス形式で開催された[1]．研究・作品発表66件，参加者数230名，半数以上が現地参加となった．新型コロナウイルスの影響で2019年以降中断していた現地開催を，２年半ぶりに再開させるにあたり，大会テーマは『カラー・レジリエンス Our transition toward COLOR resilience』に決定した．招待講演として，三鷹の森ジブリ美術館学芸員の伊藤望氏による「アニメーションの色彩　～スタジオジブリ作品を彩った保田道世氏について～」，特別学術講演として，浜松医科大学医学部の針山孝彦教授による「蟲（生き物）が観る世界を学び持続性社会を実現する蟲鳥学の創成」が企画された．お二人の講演は，参加者に大きな刺激を与え，全国大会らしい盛り上がりに貢献した．また，助成金や寄付金を活用して，受付で現地参加者にお渡しする安全アメニティ（マスクや除菌シートなど）が，製作された．このように，本大会はWithコロナにおける新たな全国大会の形を示す機会となった．

2. 大会ビジュアルのコンセプト

2021年11月，大会テーマが『カラー・レジリエンス Our transition toward COLOR resilience』に決まった．数多くの困難を抱えた世の中でも，色彩研究が，強く，美しく，しなやかに世界を開く鍵になっていくようにというメッセージが込められたテーマである．さっそく，それを視覚的に端的に示し，印象・記憶に残る大会ビジュアルを制作することになった．

デザインする際に特に大切にしたのは，「レジリエンス」というキーワードである．困難や脅威に直面しても柔軟に適応する力，再起する力を意味する．そこで，バラバラにされた色彩の配置を元に戻す立体パズル・ルービックキューブを使うアイディアが思い浮かんだ．立体パズルは，多面的な視野，論理的な思考，先を読む力がないと解くことができない．レジリエントに生き抜くために私たちに求められるものと一致すると考えた．最終的にキューブオブジェをメインモチーフとして3次元でデザインし（図1），共通素材として用いることにした．また，開催に向けて学会員が一丸となりモチベーションを高めていくにはどうすべきかを考え，広報フェーズに合わせて大会ビジュアルを3段階で展開することを思いついた．広報タイミングが，12月（発表募集），2月（参加募集），5月（前納〆切）の3回になることを想定し，表現内容を順に変化させることにした．

3. 大会ビジュアルの制作

中央に配置するキューブオブジェは，3次元モデリングソフトRhinoceros 3Dを用いて制作した．また，キューブオブジェの背景は，大会会場である椙山女学園大学の近くの東山スカイタワーから眺められる景観を撮影し，時間帯として，夜，夜明け，日中の3段階を用意した（図2）．以降では，大会ビジュアル第1弾（発表募集），第2弾（参加募集），第3弾（前納〆切）（図3）のそれぞれについて説明する．

図1. メインモチーフ

図2. 背景（東山タワーからの景観）

3. 1　第1弾 Before Day

開催まで半年，発表募集の広報に使うビジュアルであるため，まずは色彩に焦点をあてることにし，大会サイト上部に表示されたときのインパクトも重視した．イベント前夜祭に打ち上げる花火のイメージから着想し，背景の景観は夜景にし，キューブオブジェの色彩にはネオンカラーを使用することにした．また，開催地である名古屋を視覚表現したいという思いか